

平成 18 年度 卒業論文

「相手への『敬意』・『親しみ』を表わす表現

—会話中の efendim, hocam, canım などについて—

東京外国語大学 外国語学部
南・西アジア課程 トルコ語専攻 4 年
学籍番号 8502132
湯澤英美

指導教員：菅原睦教員

(40 字×36 行)

目次

1.はじめに	2
2.先行研究と問題設定	3
3.研究の概要	5
3.1.分析対象	6
3.1.1.対象となる3種類の表現	6
3.1.2.対象表現の定義	6
3.1.3.対象から除外する表現	6
3.2.その他の表現について	7
3.3.分析方法	8
4.分析結果	8
4.1.efendim	9
4.2.hocam, ođlum など 名詞+(i)m の表現	12
4.3.canım	14
5.考察	16
5.1.efendim	17
5.2. hocam, ođlum など 名詞+(i)m の表現	19
5.3.canım	21
6.まとめ	23

資料となったシナリオ

参考文献

付録

シナリオ会話例のリスト

1.はじめに

外国語の習得といえ、その言葉が使われている地域に行ってそこで生活するのが一番の上達法だと考える人がいる。個人的には必ずしもそうではないと思っているが、とりあえず「自然な会話ができるようになる」ことを目的とするならば、正しいのかもしれない。文法を学び単語を覚えても、思うように会話ができない、情報の伝達はなんとかできてもどうして「おしゃべり」にはなり得ない、そういった悩みを抱える人たちが理由として挙げるのは「ネイティブスピーカーと話す機会がない」ことで、その解決法として次に考えるのは「現地で生活してみる」ことである。たしかに、私が本学トルコ語専攻の1、2年生であったとき、留学を経験した先輩たちの話しぶりは他の学生とちがっている気がした。流暢に話せること以外に別の何かがあるように感じていた。いわば「トルコ人みたいな」話し方だったのである。しかしどこがどう違うのかわからない。文法が正しいだけでは成り立たない、「自然な会話」とは何なのか。

私が本研究で試みたのは、教科書には載っておらず、しかしネイティブスピーカーが無意識のうちに使っているために留学生が肌で感じ取って学んでくるような、会話中のエッセンスともいえる表現について解説を加えることである。このことに関しては忘れられないエピソードがある。ある日、トルコ人の先生の授業中に留学から帰ってきた学生が挨拶に来たことがあった。彼女は教室に入るなり“Merhaba hocam!”と挨拶した。もちろん私も“merhaba”(こんにちは)なら知っている。だが後ろに“hocam”と付けられているのは非常に新鮮だった。「きっと普通はそう言うものなんだ」と強く印象付けられたことを覚えている。そして半年後、トルコのアンカラ大学に日々通ううち、そのときのなんとなくの印象が正しかったとわかるようになる。こういう小さなことが積み重なって「自然」なかんじの会話を身に付けられるのだろうとも考えた。ただ、感覚的に「そういうものなんだ」とわかって、具体的な意味はつかめないままであることも多い。canımと言われて、それが「マイハニー」という意味ではないと、なんとなくわかって、それではどんなニュアンスなのかということがわからず、自分では使えないままになってしまう。相手がどういうつもりで使っているのかがいまひとつ理解できず、会話がぎこちなくなってしまう。これらの問題をなんとかしたいと思ったのが、本研究へのきっかけである。今回は efendim, hocam, oğlum など人を表す単語+(i)m の表現、そして canım の三つを取り上げながら、会話における働き、発言に与える影響を考えていきたい。より「自然」で「生きた」会話の習得を目指して、理解を深める糸口となればと思う。

2. 先行研究と問題設定

今回取り上げようとする3つの表現について、具体的な先行研究はほとんど見つからなかったが、林(1994)は発言を丁寧にする表現として *efendim* を、語気を和らげる表現として *canım* を紹介している。¹ 簡単な解説ではあるが、ここでは *efendim* は通常発言の始めか終わりに置かれると付記され、*canım* については、*yok* や動詞の否定形、命令形、さらに相手と反対の意見を表わす文の後ろに置かれる場合にその語気を和らげる働きをすると述べられている。また、*canım* は発言の始めにある場合と終わりにある場合で働きが異なることにも触れ、相手に親しみを込めて呼びかけるときには発言の冒頭に置かれると説明している。例として載せられている会話文を以下に引用する。

(1) A: Sana verdiğim ödevi yaptın mı yavrum?

「君に出しておいた宿題をやったかい？」

B: Evet efendim, yaptım.

「はい、やりました」

(2) A: Hayatım, hemen çıkmazsak uçağı kaçıracağız.

「ねえあなた、すぐ出かけなくちゃ飛行機に乗り遅れるわよ」

B: Yok canım. Ben vakti çok iyi hesapladım. Daha zamanımız var. Endişelenme güzelim.

「そんなことないよ。私はちゃんと時間を計算してあるんだ。私達はまだ時間がある。心配することないよ、おまえ」

上の例(1)では、質問されて答えるときにただ *evet* と言うよりも、後ろに *efendim* を付けたほうが発言が丁寧になるということがわかる。しかし話者AがBに対して *sen* を使っているということ以外に両者の関係を表わすものがないため、どんなときにどんな相手に使える表現なのかは判断しにくい。

(2)は話者の関係がより推測しやすいが、その関係ゆえに *canım* の用法が捉えづらくなっている。お互いに *hayatım*, *güzelim* と呼び合っているところから、夫婦や恋人同士の会話であると想像するのが自然であるが、それではこの場合の *canım* は単に「語気を和らげる」ための表現なのか、それとも「親しみを込めて呼びかけ」ているのか。「呼びかけ」である場合は発言の冒頭に来るという解説もあり、またこの会話例は「語気を和らげる」表現のためのものであるから、やはりここでは前者であろう。しかし、親しい間柄だから使われる表現なのか、親しさに関係なく「語気を和らげたい」ときに使ってよい表現なのか、この例だけでは判別が難しい。

トルコ語英語辞典を調べてみると、まず *efendim* については丁寧表現であることが記され

¹ 林徹『トルコ語会話の知識』大学書林、1994年、36、240頁

ている。²以下にその部分を引用する。

efendim 1. yes? (as an answer to a call); 2. I beg your pardon?; 3. sir; ma'am; 4. added to a sentence for politeness.

ここで注目すべきは 4.の意味で、発言を丁寧にするために付け加えられる表現であるという。これは林の説明と一致している。ではトルコ語の辞書ではどうかというと、³以下に引用するように 3 番目の意味として「丁寧または尊敬のために発言に付け加えられる」という解説が載っている。

efendim 1. Bir sesleniş karşısında 'buradayım' anlamında kullanılır; 2. Anlaşılmayan bir sözü tekrarlatmak veya karşındakinin ne düşündüğünü sormak için söylenir; 3. Nezaket veya saygı için söze katılır.

1. 呼びかけに対して「ここにいます」という意味で使われる。2. わからなかった単語を繰り返してもらうために、または相手が何を考えているのかを尋ねるために使われる。3. 丁寧または尊敬のために発言に加えられる。

次にcanımについて、これもトルコ語の辞書においてcan(心、魂、気持ちなどの意)からの派生語として挙げられている解説を引用したい。⁴

canım! 1) hoşnutsuzluk anlatır; 2) sevgi seslenişi olarak kullanılır; 3) (ca'nım) çok güzel, çok değer verilen.

1) 不満な気持ちを表わす。2) 愛情表現として使われる。3) 非常によい、価値を評価されている

ここでは 1 番目に「不満な気持ちを表わす」という説明がなされている。トルコ語英語辞典では特に canım についての表記はなかった。

hocam, başkanım などの名詞+-(ı)m の表現については辞書にも載っておらず、これといった先行研究はみつからなかった。

上記のことから、これらの表現の用法や働きについて曖昧な点が多いことがわかる。本

² Resuhi Akdikmen, *Langenscheidt Standard Dictionary English-Turkish Turkish-English*. İstanbul: İnkılap Kitabevi, 2001, p.120

³ *Türkçe Sözlük*. Ankara: Türk Dil Kurumu, 1998, p.673

⁴ 同書、p.381

稿では、これらの表現が実際に会話の中にどのように現れ、どのような人間関係の中で使われるのかを分析しながら、それぞれの表現の働き、会話の中での役割について明らかにしていきたい。

3.研究の概要

ここでは、2.での疑問点を明らかにするためにどのような研究を行ったのか、その方法や

対象となる表現をどう定義したかについて詳しく説明する。

3.1.分析対象

3.1.1.対象となる3種類の表現

今回研究の対象にするのは会話に現われる *efendim*, *hocam*, *oğlum*, *canım* などの表現である。これらは全て、名詞に1人称所属人称接尾辞・(i)m をつけて作られる表現であるが、本稿ではこのような表現が文字通り「私の～」という意味で使われているのではない場合を取り上げる。また、*efendim* と *canım* はもはや決まり文句のように独立した形であると判断し、ここでは他の表現と区別して扱う。したがってこれら二つの表現と、それ以外の名詞＋(i)m という形をもつ表現の3種類を本稿での研究対象とする。

3.1.2.対象表現の定義

本稿では対象にする3種類の表現について、会話中で相手に対する発言者のなんらかの「心情」をあらわす表現・挿入句としての役割を見出している。この「心情」と定義したものは「尊敬」「親しみ」「思いやり」など、使われる場面によって内容を変えるものであるが、発言になんらかのニュアンスを付け加え、相手にもそれが伝わるという点で、一致した役割をもつと言える。

今回、上記のような働きをもつと見られる例を集め分析する際、その表現があるかないかで会話のもつ意味が変わるのかどうかに着目した。のちに詳しく説明するが、話している内容は全く同じであっても、それを付け加えるかどうかによって発言が丁寧になったり粗雑になったりというように、相手に対する発話者の態度を表す役割をもつと捉えることが可能である。

3.1.3.対象から除外する表現

ここで注意しなくてはならないのは、各表現のもつ別の意味についてである。それぞれ形は同じであっても全く機能が違う場合があり、それらを明確に分けて混同しないようにする必要がある。以下に、今回の対象とはならない例を挙げる。

1. *efendim* ・相手の呼びかけに応じたり、問いかけられて聞き返したいときの表現
例: “Ayşe!!” “**Efendim**”
 「アイシェ!!」「なに？」
 “Çok başım ağrıyor.” “**Efendim?**”
 「すごく頭が痛い」「え、なんですって？」
- ・話し始めるときなど、聞き手の注意をうながしたいときに使われる「呼びかけ」

例: “ Kendinizi tanıtır mısınız?”

「自己紹介をしてくれませんか」

“ Efendim, ben Yamada. Geçen ay Japonya’dan geldim....”

「ええ、私は山田です。先月、日本から来ました…」⁵

2.名詞+-(i)m

・話しかけるとときや、相手に呼びかけるとき

例: “ Hocam, ne zaman sınav yapacaksınız?”

「先生、いつテストをするんですか」

・限定された関係でのみ使われる親愛表現またはそこでの呼びかけ

例: “ Hayatım, şu kapıyı kapatır mısın?”

「あなた、そのドアを閉めてくれない？」

他の表現例: hayatım, aşkım, yavrum, şekerim, tatlım, güzelim など

3.canım

・上記の 2.同様、親愛表現としての使われ方、呼びかけ

例: “ Saadet. Canım. Hoş geldin şekerim.”

「サーデットちゃん。いらっしやいようこそ」

「呼びかけ」とは相手の注意を引くための表現であり、そこに何か感情が含まれるものではない。もちろん親しい人に対する呼びかけと、改まった場面でのそれは違ったものになるであろうが、いずれにせよ最大の目的が「相手の注意を引く」ことであるのには変わりなく、相手に何かを伝える働きがあるとは言いがたい。また、わかりやすい区別の仕方としては、すでに発言の向けられた相手ははっきりしていること、「呼びかけ」表現がなかったとしても誰に対する発言なのかが明確で、発話として問題がないことを一つのものさしにすることができる。

同様に、聞き返すために使われる efendim も、そこに尊敬や親しみなどの感情が含まれているわけではない。また、親愛表現は夫婦や恋人同士など、限られた関係内でのみ使われるという性質から、今回の研究対象には当てはまらないと判断した。そもそも本稿は愛情表現以外で使われる canım の用法、意味合いの研究を目的の一つとしているので、文字どおりに受け止められる(「私の心」?)場合は対象として不適である。

3.2.その他の表現について

今回対象とする表現以外にも、beyefendi, hanımefendi, ~bey/hanım, ~ciğimなど様々な表現がある。呼びかけとしての機能を果たす一方で、これらの表現も本稿で取り上げる表

⁵ 林徹『トルコ語会話の知識』大学書林、1994年、p.36

現と同様の働きをもっている可能性がある。しかし分析できるほどの資料も集まらず、また「呼びかけ」として受け取れる例も多かったため、今回は対象としなかった。ただし、使い方によっては対象表現と同じ役割をもつことも十分に考えられることを補足したい。⁶

3.3.分析方法

今回対象とした表現はどれも会話で使われる表現である。本来なら自然会話の中から該当表現を取り上げ、分析することが理想であるが、データの収集が困難でまた非効率的であることから、さまざまな劇のシナリオ中の会話を使用した。⁷話者の上下関係や、会話の背景などを把握しやすいという利点があり、また劇として上演されるものである以上、極端に不自然な使われ方はないと判断した。

集めた資料をまとめるにあたっては、基本的に人物の地位や立場がわかるような情報（職業など）を優先し、補足として性別や年齢なども付記した。また話者の上下関係や距離をはかるものとして、話し手が相手を **sen** と **siz** のどちらで呼ぶかに着目した。

4.分析結果

ここでは、シナリオから集めた会話をもとにそれぞれの表現を分析した結果をまとめる。発言のどこに現われるのか(冒頭、文の最後など)、またはどのような発言で使われているか、

⁶ このことに関しては、トルコ人に直接聞き取り調査を行い、対象表現との置き換えが可能な場合もあるとの回答も得られている。

⁷ 各シナリオの題名、ページ数などは巻末に表記。

さらに一連のやりとりの中でどの程度頻繁に現われるか(①)、誰が誰に向かって使っているのか(職業や地位・立場など、②)互いに相手を *sen/siz* 「きみ」「あなた」のどちらで呼んでいるか(③)、話者の性別、年齢(④)。これらの点からそれぞれの表現の使われ方を分析した。

表現によって用いられる頻度にかなり差があり、*efendim* に関しては非常に多くの会話例を集めることができた一方で、*canım* や *hocam, oğlum* などの表現はさほど多くは現われなかった。

例文はどれもシナリオ中の会話であるが、日本語訳には各表現の訳を記していない(*hocam*→『先生』など)。しかし特に訳出はしていないものの、その表現が用いられることによって発言のニュアンスが変わると判断できる場合には、なるべく日本語でもそれが表われるよう配慮した。

4.1. *efendim*

① 現われ方

efendim の現われ方にはいくつかの特徴がみられた。一つ目は *evet* 「はい」や *hayır* 「いえ」などの返事および質問に対する返答のすぐ後ろに付けられる場合(例 1.2.3)、二つ目は発言の最初の文の終わりに付けられる場合(例 4)。さらに、長い発言の最後の文の末尾に付けられる場合があった(例 5.6)。全体的に見て、発言の冒頭に来ることはない。

例1. A: Telefon edip Sahil'de yer ayırttınız mı?
「電話して『サーヒル』で場所をとってくれましたか？」
B: Elbette *efendim*.
「もちろんです」

例2. C: Kahveyi nasıl içersiniz?
「コーヒーはどのように淹れましょうか」
D: İçmeyeyim *efendim*.
「いえ結構です」

例3. E: Ablanız nasıl hanım kızım?
「お姉さん(の病状)はいかがですか？」
F: Çok iyi *efendim*. 「とてもいいです」

例4. A: Sıra yatak sahnelerine geldi, onları nerde çekeceğiz *efendim*? Yatak odasını kullanmak için izin alabilecek miyiz? Ben konuşayım mı, siz mi konuşursunuz?

「次はベッドシーンですが、どこで撮影しましょうか。寝室を使う許可をもらえるでしょうか？私が話しましょうか、監督が相談なさいますか」

B: Sevda konuşsa daha iyi olur, ikna etmek gerekir belki...

「セヴダが話した方がいい。説得しなくてはならないかもしれないから…」

例5. A: Ne zaman taburcu oldular demıştiniz?

「彼らがいつ退院したと言いました？」

B: Taburcu olmadılar efendim. Yüksek mahkemenizde bulunabilmeleri için, hastahaneden özel izinle getirdik kendilerini. Dosyadaki fotoğraflar incelendiğinde, her üç evin de yerle bir edildiği görülecektir efendim.

「まだ退院していません。高等裁で裁判があるので、病院から特別に連れて来たのです。……ファイルの写真をご覧いただくと、3軒とも全壊させられているのがおわかりかと思います」

例6. C: Umarım dosyada kanıtlayacak belgeleriniz mevcuttur.

「ファイルの中に、それを証明できる書類があるといいのだが」

D: Mevcut efendim. Ama, özel kliniklerin tedavi raporlarının geçerli sayılmayacağını bildiğimiz için, müvekkilerimin devlet hastanelerinde kontrolden geçirilmelerini talep ediyorum efendim.

「あります。しかし、民間医院の診断書は認められないと知っていますので、依頼人の公立病院での受診を要求いたします」

例 5,6 にあるように、発言の最初の文の終わりと最後の文の終わりに **efendim** を付け、全体を挟むような形も多く見られた。いずれにせよ、集めた資料を見る限りでは、発言の長短に関わらず **efendim** によって発言が締めくくられることが非常に多い。

また現われる頻度については、⁸特別な規則性があるようには見えなかったものの、一度表現を使った相手には頻繁に繰り返して使っている印象を受けた。一つの会話のやりとりの中で、とりわけ質問に対する返事においてはほぼ毎回現われる例も少なくない。

② 話者

どんな立場、職業の人が誰に向かって使っているのか。主な結果を以下に列挙する。

使用者

受け手

⁸ ここでは、同じ話者から成る会話の中でどの程度頻繁に使われるかを指す。

役人	→	将官
メイド	→	女主人(雇い主)
呼び込みの男	→	男
社長	→	映画監督
アシスタント	→	映画監督(自分の上司)
秘書	→	社長(自分の上司)
女優	→	社長
患者の妹	→	医師
検察官	→	裁判長
被害者	→	裁判長
弁護士	→	裁判長
被害者	→	被疑者の若者(自分に害を与えた人)

上記のような結果の中で、二人の話者が互いに **efendim** を使うという状況は見受けられなかった。

③ 相手への呼称 **sen/siz**

efendim の使用者は相手をどちらで呼ぶのか。また受け手は相手をなんと呼ぶのか。ここでは二つのパターンが見られた。すなわち、**efendim** 使用者が相手を **siz** と呼び、その受け手は **sen** を使う場合、そして **efendim** の使用者と受け手が共に **siz** で呼び合う場合である。どちらの場合も、**efendim** を使う方は相手を **siz** で呼んでおり、**efendim** を使いながら相手を **sen** と呼ぶことはまずないと言える。表で示すと以下のようなになる。

		efendim 使用者の相手への呼称	
		sen	siz
受け手の相手への呼称	sen	×	○
	siz	×	○

④ 性別・年齢

efendim の使用者、受け手の性別については完全にランダムで、性別による使い方の制限はないと判断できる。また年齢については意識的に調査しなかったが、「年上」であることが非常に大きな尊敬に値する場合以外はほとんど関連性がないように思われる。このこと

については 5.考察で詳しく述べる。

4.2.hocam, oğlum など 名詞+-(i)m

-(i)m については、元となる単語の性質によって二つに区別してから分析したい。すなわち hoca「先生」 başkan「大臣、～長」 general「将官」 müdür「校長」などの職業的地位からなるものと(区分 1)、 kız「娘」 oğul「息子」 evlat「子供」などのもともとは家族に使われる単語からなる場合(区分 2)の 2 種類である。

① 現われ方

-(i)m 表現の現われ方には特に規則性はないように見えるが、会話の冒頭に来ることはあまりない。会話の終わりに出てきたり(例 1)、会話中の文の末尾に付けられることが多い(例 2)。 evet/hayır「はい」「いいえ」といった返事のあとに付けられることもある(例 3)。先に述べた区分によって異なる現われ方をすることもない。

- 例7. A: Unutun onları. Hiç birşey bilmiyoruz.
「もう忘れて、そのことは。私たちは何も知らないのよ」
B: Tamamır. Ben unuttum.
「わかった。もう忘れたわ」
C: Ben de aklımı boşalttım.
「私も頭の中を空っぽにしたわ」
B: Orada zaten kimse yoktu **kızım**.
「あそこには元々だれもいなかったのよ」
- 例8. A: Yahu, yenir yutulur yalan mı bu?
「おい、うまく丸め込める嘘なのか、それは？」
B: Yutarlar mı **başkanım**? Kaymakam beyin elinde nüfus sayımı var.
「引っかかるはずがないでしょう。郡長は人口を把握してるんですから」
- 例9. A: Tabii ki, iki saat yemek molası var. Onların da insan olduğunu unutmamak gerek...
「もちろん、2時間の食事休憩がある。彼らだって人間だということを忘れてはならない…」
B: Evet evet, haklısınız **hocam**, akıl edemedim. Bu duruma göre tam beş saat çalışıyorlar... Yani altmışla çarparsak, tam üçyüz dakika ediyor...

「ああはい、その通りです。気が付きませんでした。ということは、ちょうど5時間働いていることになる…。つまり、それに60をかければ、ちょうど300分になって…」

現われる頻度について、とりわけ区分2の場合はそれほど頻繁には使われていない。一回の発言の中で冒頭部分と末尾の両方に現われるような例もなく、やりとりの中でも毎発言ごとには使われていない。区分1もおおむね似たような結果であるが、一例だけ非常に頻繁に現われるケースがあった(5.考察を参照)。

② 話者

誰が誰に向かってこの表現を使っているか、ここでは先の二つの区分ごとに分析したい。以下に区分1と2それぞれの使用者と受け手の例を挙げる。

区分1(hocam, başkanım, müdürüm, generalim など)

使用者	受け手
役人	→ 将官 (generalim)
元学生	→ 校長 (müdürüm)
元学生	→ 教師 (hocam)
村長	→ 郡長 (başkanım)

区分2(kızım, oğlum, evladım など)

使用者	受け手
医師	→ 受け持ち患者の家族 (kızım)
若者	→ 若者(自分の友人) (oğlum)
老人	→ カフェのウェイター (oğlum)

③ 相手への呼称 sen/siz

区分1の場合、-(i)m 表現の使用者はたいてい相手を siz で呼んでいる。そして受け手からは siz か sen で呼ばれている。また、使用者が相手を sen で呼び、受け手からも sen で呼ばれるケースもあった。

区分2の場合は互いに sen を使うか、表現の使用者が相手に sen を使い、受け手が siz を使うというパターン、さらに使用者と受け手が互いに siz を使う場合もあった。

つまり区分1では、使用者が sen を使うのに受け手が siz というパターンだけでなく、逆に区分2では使用者が siz を使うのに受け手が sen というパターンだけがないことになる。

区分1

	-(i)m 使用者の相手への呼称		
受け手の相手への呼称		sen	siz
	sen	(○)	○
	siz	×	○

区分 2

	-(i)m 使用者の相手への呼称		
受け手の相手への呼称		sen	siz
	sen	○	×
	siz	○	○

④ 性別・年齢

区分 1 は職業的地位で相手を呼ぶかたちであるため、性別や年齢はほとんど関係ないように思われる。一方、区分 2 の場合 **kızım** はやはり女性に、**oğlum** は男性に対して使われており、**evladım** とともに受け手が同年代の友人か、年下である場合に限って用いられている。

4.3.canım

① 現われ方

文末に付けられたり、会話の冒頭に現われることが多い(例 10.11.12)。よく見られる形としては、**yok** 「いいえ」の後ろに付けられる場合がある(例 13.14)。

例 10. A: Hala uyuyor demek. Yuh be. Saat beş olmuş. İkibuçuk muydu neydi yattığında.

「まだ寝てるってことね、まったく。もう 5 時なのに。2 時半だったっけ？
彼女が寝たの」

B: Bırak uyusun **canım**.

「まあ寝かせておいてあげたら」

例 11. A: Ne yaptım ki ben?

「私が何をしたっていうの？」

B: **Canım** bizi bıraktın, oğlanlara gittin. Kaçta döndün kimbilir?

「私たちを置いて、男の子たちのところへ行ったでしょ。何時に帰ってきたかだってわかりやしない」

例 12. A: Onun odası değil bir kere. Senin odan orası.

「言っとくけどあの子の部屋じゃないわよ。あんたの部屋でしょ」

B: **Canım** verdik artık.

「もうあげたじゃない」

例 13. A: Hadi hadi çekinme...

「ほらほら、遠慮しないで…」

B: Size zahmet olacak...

「あなたに迷惑になりますから…」

A: Yok **canım** ne zahmeti?

「何言ってるの、迷惑なんて」

例 14. A: Benim fazladan göğüs kemiklerim de kırık efendim.

「私は肋骨が折れています」

B: Sen daha çok sevdikleri belli oluyor. Sen ne iş yaparsın? Yoksa sen de... Yok **canım**, tanıyorum seni. Muhalefet liderisin değil mi?

「他の人よりも気に入られたのは見ればわかる。君は何の仕事をしてるんだ？さてはまた…。いや、知ってるとも君のことは。野党党首だな？」

現われる頻度はそれほど多くない。相手の発言内容によって大きく左右されると思われる。親愛表現としての **canım** ではない以上、ひとつの発言内、全体のやりとりどちらにおいても頻繁に現われる例はなかった。

② 話者

使用者	受け手
若者	→ 若者(自分の友人)
裁判官	→ 若者(被疑者)
裁判官	→ 被害者
上司	→ 部下
姉	→ 妹
父	→ 息子
娘	→ 母
学生	→ 教師

③ 相手への呼称 sen/siz

使用者と受け手が互いに **sen** で呼び合う場合が非常に多いが、受け手が使用者に **siz** を使う場合や、互いに **siz** で呼び合う場面もあった。また、使用者が **siz** を使っているのに受け手から **sen** で呼ばれるパターンは見られなかった。

canim 使用者の相手への呼称			
		sen	siz
受け手の相手への呼称	sen	○	×
	siz	○	○

④ 性別・年齢

使用者、受け手ともに性別との関連性はないと判断できる。年齢については、同年代の相手に使われることが多いように思われるが、年齢だけで使われ方が限定されるような例はなかった。年齢が違うことで上下関係や親しさに影響する場合もあるが、このことについては考察で詳しく触れたい。

5. 考察

ここでは、前章でまとめた結果について考察していく。前章で分析した現われ方、話者の関係、相手への呼称、性別や年齢などをふまえて、各表現が会話の中でどんな働きをもつのかを考えた。

まず、会話中での現われ方を見ると、表現によって頻度に差があることがわかる。しかし、どの表現を見ても現われ方に規則性のようなものは見出されなかった。つまり発言のどこで表現を使い、会話全体の中でどの程度用いるかは話者次第ということで、発言の内容によって必ず使わなくてはいけないという決まりはないように思われる。表現そのものの性質として、たとえ使われなかったとしても発言に込められた「情報」は不足なく相手に伝えられる。そこに各表現を加えることで、プラスアルファのもの、すなわち話者の「心情」を表わすことができるのではないだろうか。発言の冒頭に来るか末尾に来るかなどの現われ方や、各表現が表わす「心情」の種類は異なっても、話者のなんらかの気持ちを発言に反映させる役割をもつという面では共通した働きがある。

以上のことを踏まえた上で、それぞれの表現がどのような「心情」を表わすのか、具体例を挙げながら明らかにしていきたい。

5.1.efendim

efendim の表現について分析結果全体をみて言えることは、話者の間に上下関係もしくはそれに類似する関係がみられ、そこで「目下」となる話者が「目上」の相手に対してこの表現を使っているということである。以下、具体的に根拠となることがらを挙げて詳しく説明したい。

まず、誰が誰に向かって使っているのかという話者の関係を見てみると、メイドが自分の雇い主に対してであったり、秘書やアシスタントが社長、監督に、つまり自分の上司との会話で使っていることがわかる。ここでの話者の関係は職場での地位、上下関係にもとづいたものであり、会話の中でどちらが目上となるかは明らかである。一方、裁判でとりわけ裁判長に対して使われていること、患者側の人間が医師に対して使っている例などは、必ずしもはっきりした上下関係があるとは言えない。しかし裁判でもっとも権威のある人物、または患者を診ている医師が相手から「目上」であると認識されるのはごく自然なことと判断できる。このように考えると、社長と映画監督、女優と社長というような一見どちらが「えらい」のか判断できないような例でも、その状況の中で使用者が相手を目上と捉えた、またはそういった感情を表現しようとしたと考えれば説明がつく。ただ唯一、被害者である元総理大臣が自分に害を与えた若者に対して使っている例が例外的である。以下にその部分の会話を引用する。

- 例 15. Delikanlı – (Alay ederek) Çok üzöldüm efendim. Ağrılarınız nerenizde?
若者 (からかいながら)「本当に悲しいです。どこが痛いんですか？」
1.Başbakan – (Öfkeyle) Biliyorsunuz işte...
一人目の総理大臣 (怒りながら)「わかっているだろう…」

Delikanlı – Karşıdan bakılınca, omuzunuz bacağınız ağrıyor, burnunuz sızlıyor gibi geliyor. Yüreğiniz de sızlıyor mu acaba?

「向かいから見ると、胸と足が痛んで、鼻がシクシクしているように見えますが。心も痛んでるんでしょうかね？」

1. Başbakan – Yüreğimiz niçin sızlayacakmış efendim?

「なぜ私の心が痛むのかね？」

これは、自分の思想を訴えるために政治家の家を襲撃した若者と、その被害者である政治家の裁判でのやりとり、という設定である。年齢や社会的地位からは、少なくとも男(政治家)が若者を目上の人物として捉える理由がみつからない。その上、怪我をさせられ損害をこうむっているのに、若者からは人を馬鹿にしたような口調で話しかけられている。このような状況で使われている **efendim** に丁寧さや目上意識を表わす働きがあるとは考えにくい。したがってここでの表現は、あえて慇懃にふるまうことで発言に皮肉を込めるためのものと判断できるだろう。

次に、相手への呼称 **sen** と **siz** の使い分けについてであるが、表現使用者がすべて相手を **siz** で呼んでいる点に注目したい。相手からどう呼ばれているかはともかく、相手に **siz** を使うということは相手を目上と捉えている、または相手との距離を意識していると言え、先に述べた論と一致する。また、一方が **siz** で呼ぶのに対し他方が **sen** を使う場合は、この呼称を見るだけで確かにそこに力関係、上下関係があると言えそうだが、そうでない場合、つまり互いに **siz** を使う場合にこそ、この **efendim** の働きが浮かび上がってくる。分析結果の際に触れたが、話者が互いに **efendim** を使い合うという例はなく、どちらか片方が使うに限られている。このことから、**siz** を使うだけでは表現できないもの、すなわち相手との距離感や「改まった感じ」以上のものを伝えるのに **efendim** が使われているのではないかと考えられる。

ここで、質問に対する返答で **efendim** が使われていない例と比較してみたい。

例16. A: Eşiniz çalışıyor mu?
「奥さんは働いているんですか？」
B: Evet. Dişçidir.
「ええ、歯科医ですよ」

例17. A: Bu ilk filminiz mi?
「これが初めての映画ですか？」
B: Evet, ilk filmim.
「そうです。初めてです」
A: Hayırlı olsun.

「おめでとうございます」

B: Sağ olun. Burası sizin mi, yani size mi ait?

「ありがとうございます。ここはあなたのですか、つまり、あなたが所有しているんですか？」

A: Evet, annemden kaldı. Filmin konusu ne Sevda hanım?

「はい、母が遺したものです。映画のテーマは何なんですか、セヴダさん」

例 1 は弁護士(話者 B)とその依頼人の女子学生(話者 A)の会話である。二人は互いに *siz* で話をしているが、どちらも *efendim* という表現は一度も使っていない。弁護士の側から見れば、依頼人と言えども相手は年下で、*siz* という改まった話し方をしても「目上」として認める存在ではないということか。例 2 はよりわかりやすい。話者 C が俳優(男性)、話者 D は撮影場所を提供している会社社長(女性)であるが、両者は知り合ったばかりという関係で互いに *siz* を使っている。それなりに丁寧に話す必要のある状況だと言えるであろう。しかし、どちらも *efendim* という表現は用いていない。つまり、丁寧ではあっても上下関係は持ち込まれていない会話、と考えられるのではないか。

今回の分析結果には、性別や年齢による使い方の制限は表われていなかった。例えば年上であることがそのまま「目上」と認められることにつながるのであれば、*efendim* を用いることで話者の敬意を表わせるのかもしれない。ただ、集めた資料の会話を見ると、頻繁に使われているのは裁判のような非常に改まった場面か、部下と上司といった明らかな上下関係がある場合に多い。年齢や性別のみにもとづく話者の関係の中では、あまり使用されない表現であるような印象を受けた。

以上のことから総合して、この表現は基本的には相手への発言を丁寧にする役割をもち、それゆえに目上の人物に用いられるべきもの、または話者の相手に対する目上意識を示すものであると捉えることができる。

5.2. hocam, oğlum など 名詞+-(i)m

次に、名詞+-(i)m の表現について考えていく。前章で、元となる単語の意味によって二つの区分に分けたが(4.1.2 参照)、ここでもその区分を使いながら考察していきたい。

誰が誰に対して使っているかという話者の関係を見ると、区分 1(*hocam, başkanım,*

müdürüm など)については元となる単語の意味がそもそも職業や立場を表わすものであるため、話者同士の立場は比較的わかりやすい。教師や大臣、学校長といった人物に対して学生や役人などがこの表現を用いていることから、相手に対する敬意の表われであると考えられる。一方で、区分 2 の場合は表現の受け手が若者であることが多く、使用者は同年代の友人か相手より年上となっている。やはり元の単語の意味が大きく影響していることがわかるが、本来の意味での「自分の娘」「息子」ではないわけだから、友人同士が使う場合にせよ医師が患者の妹に使う場合にせよ、それぞれ相手を自分の娘(息子)のように、つまり大切な存在として捉えていることを表わすのかもしれない。

使用者の *sen* と *siz* の使い分けを見ても、上記と同様のことが伺える。すなわち、区分 1 の場合はほとんどの例で相手に *siz* を使っており、相手を目上の存在として、または相手との距離を意識していることがわかる。互いに *sen* で呼び合っている例もあったが、この場合は表現の使用者は発言内で表現を何度も繰り返し、相手の地位を用いた敬称を使いながら相手にへつらっているように見える(例 18)。日本で政治家に「先生」と呼びかけることが独特のニュアンスをもつように、形としては「尊敬」であっても中身が伴っていない例とも考えられる。

例18. A: İsmail!

「イスマイル！」

B: Buyur başkanım.

「はい、なんでしょう」

A: Sizin köyün muhtar seçimi ne zaman?

「お前のとこの村では選挙はいつだ？」

B: Ne bilirim başkanım? ‘Seçim’ derler, gider atarız kuru oyumuzu.

「知りませんよ。『選挙だ』と言われて、行って投票するんです。無意味な票をね」

A: Öyle deme. Seçim demek, politika demek. Önemli bir şey.

「そう言うな。選挙とは政治だ。大切なものだ」

B: Aklımız mı erer sayın başkanım?

「私たちに理解できるとでも？」

一方で、区分 2 では相手に *sen* を使うことが多い。受け手からも *sen* で呼ばれていれば表現使用者と受け手が親しい間柄であると言えるし、そうでない場合、つまり受け手からは *siz* で呼ばれている場合は表現使用者が相手よりも上の立場であると判断できる。さらに、両者とも *siz* を使う例については、これは医師と患者の家族という話者の関係などから表現使用者の方が上の立場にあると言え、その上で医師が丁寧な話し方をしていると考えられる。このような状況で発言内に含まれる感情は「相手への親しみ」ではないだろうか。

5.3.canım

まず話者の関係から考えると、表現使用者はふつう相手と同等の立場にいるか目上でなくてはならないようである。若者同士の会話や、裁判官が被疑者の若者に対して使っている例がそれに当てはまる。もっとも、多くの場合は互いに *sen* で呼び合うような親しい間柄の会話で用いられており、改まった場面や目上の人物に対してはほとんど使われていない。このことから、裁判中の発言に現われたのはイレギュラーな例とも考えられる。(例 18) また学生が教師に対して使っている例もあったが、これは発言の内容や場面背景などから考えると、相手を見下した発言と判断できる。(例 19)やはり本来なら親しい間柄で使われるべき表現を教師という目上の人物に使うことで、相手にぞんざいな印象を与えているのであろう。

例19. A: Ne olmuş sol göze?

「左の目がどうしたって？」

B: Kapanmış efendim. (*İki maznunu işaretleyerek*) Kapanan göz, onlarda sağ (*Üçüncüyü işaretleyerek*) onda, sol efendim.

「つぶれてしまったようです。(二人の被害者を指し)つぶれたのは彼らの場合は右目、(三人目の被害者を指し)彼のは左目です」

A: **Canım** aralarında o kadarlık fark olmasın mı yani?

「そんな些細な違いもあってはいけないというのか？」

例20. A: Lise ne demektir sayın hocam?

「高校とはどういう意味ですか、先生？」

B: Ortaokulla üniversite arasındaki tahsil dilimi.

「中学と大学の間にある教育機関だ」

A: Harika. Çok güzel anlattınız hocam. Siz zaten dersleri de çok güzel anlatırdınız. (Biraz sokularak) o dayak olayını da unutun artık **canım**, aradan yıllar geçti.

「素晴らしい。いい説明ですね。もともと先生の授業はわかりやすかったから。(やや親しげに)あの暴力事件も、もう忘れてくださいよ。あれから何年も経ったんだし」

sen と *siz* の呼称についても、表現使用者が相手を *sen* で呼ぶことが非常に多く、この表現が親しい間柄または日常的な場面で使われることが多いとわかる。目上の者が目下の者に対して使うことができる表現とも言えるであろう。また、尊敬の意味を込めて *siz* と呼ぶべき相手に対してはほとんど使われていない。互いに *siz* と呼び合う会話でも使われている

が、この場合は話者の間に特に上下関係が見られないので、相手との距離を意識して用いられる **siz** であると考えられる。

年齢や性別に関しても特別な制限があるようには見えなかったが、上記のように目上の人物に対しては使われにくい表現であることから、「年上＝目上」となる状況では使われることが少ないと考えられる。

次に、**canım** という表現が発言にどのような意味を付け加えるのか、どんな役割をもつのか、いま一度ここで考えたい。先行研究では「言い方を和らげる」という解釈があったが、集めた会話例を分析するとより具体的な特徴が見えてくる。ここでは **canım** を話者の心情を表わす表現として捉えているが、さらにそれを表わされる内容によって二つに分類したい。すなわち相手の発言の一部または全体を受けて、それに対して何らかの反論をしたいがきつい表現にならないよう配慮している場合、そして相手の発言が思いもよらないような内容でそれに対する驚きを表わしたい場合の二つである。前者の用法では、そこに含まれるニュアンスは「たしなめ」「柔らかな言い方」といった相手への「思いやり」に相当するものであり、一方で後者の場合は「まさかそんなわけないだろう」「もちろんそれは当然だろう」という心情が発言に加味される。前章で示した例で言えば、例 10、11、12(p.13) は前者のパターンであり、例 13、14 は後者となる。ここでも新たに以下のような例文を挙げて詳しく解説したい。

- 例21. A: **Gördün mü bak? Benim yaptığım doğru.**
「ほら見なさいよ。私のやったことは正しかったのよ」
B: **Canım** o sporcu.
「彼はスポーツ選手よ」

- 例22. A: **Neler uyduruyorsunuz siz böyle.**
「何をそんなにでっち上げているんですか」
B: **Haydi canım!** Bunu duymayan, bilmeyen var mı şu ülkede?
「またまた。これを聞いたことのない、知らない人がいるかい、この国で？」

例 20 の訳文には特別 **canım** のニュアンスを含ませていないが、意味としては「まあ、でも彼はスポーツ選手なんだから」「だって彼はスポーツ選手じゃない」といった感じであろうか。相手の強気な発言をたしなめている。他の例を見ても同様に、相手の発言内容を受け、それに反対したり言い返すときにもつぱら **canım** が付けられている。単に語気を弱めるだけの働きであれば目上の人物にも用いられそうだが、そうでないところを見ると、やはり「たしなめる」「とりなす」ようなニュアンスをもち、「まあまあ」と相手をなだめるような話者の気持ちを表わしていると考えられる。

一方、例 2 の場合は **canım** のもつ意味合いが変わってくる。相手の言っていることに反

発しているのは同じだが、そこには相手の発言内容に対する驚きのようなものが含まれている。どんな場合でも「驚き」であるとは言いがたいが、相手の発言内容が受け手にとって期待していたものでないことを表わすと言えるであろう。そして相手の発言を肯定するにしろ否定するにしろ、それが話者にとって「当然」であるというニュアンスを付け加えている。

このように考えていくと、どちらも相手の発言に対して「一体何を言っているんだ」という驚き、反発、自明といった気持ちをもった場合に使われていることがわかる。例 1 の場合はそれが弱いかたちで表現され「たしなめ」となり、例 21 のパターンでは強いかたちで表われて「もちろんそうだ(そうではない)」というニュアンスを帯びる。相手との上下関係や立場に対する認識を示すのではなく、相手の発言に対しての話者の印象、気持ちを表わすものである。

6.まとめ

最後に、これまで論じてきた内容を総括しながら、各表現の共通点および相違点について触れ、その働きと役割について結論をまとめたい。

本稿では、話者の「心情」や「態度」を発言に映し出すものとして対象表現を捉えてき

た。これは各表現に共通する機能だと言えるであろう。これまでの全ての例において、表現が用いられない場合でも発言の内容そのもの、つまり話者が伝えようとする「情報」には影響がないと判断することができた。このことは、筆者が付けた日本語訳の中に各表現の直訳に当たるものがないことからわかる。これらの表現は、発言の内容を変えるものではなく、発言をしている話者の態度をよりはっきりと表わすために用いられている。

一方で、表わす「心情」の具体的な内容はそれぞれで異なる。**efendim** という表現は、基本的には使用者の「尊敬」の念を表わし、シナリオを分析した限りでは話者が互いに使うということのない表現であった。上下関係が明らかな状況で、目下の者が目上の者に対してそれを表現するために用いていたからである。しかしながら、例えば入り口で相手を先に促し譲りあう場面では '**Siz buyrun efendim**' '**Hayır hayır, siz buyrun efendim**' ('お先にどうぞ」「いやいや、どうぞお先に') というやりとりが行われるという。このような場合は、上下関係が確立していない状況で、互いに相手のことを上に置こうとして **efendim** を使っていると解釈できる。また逆に、相手から無礼な扱いを受けていながら、それでもなお **efendim** を使うという例からは、使用者の皮肉が見て取れる。

hocam, oğlum などの表現は、もととなる単語の意味をかなり残した表現と言えるが、やはり単純に「先生」と訳してはそぐわない面が多々ある。例えば教師から '**Merhaba**' 「こんにちは」と声をかけられたら何と答えるかという問いに対し、ほとんどの学生が '**Merhaba hocam**' という回答をしている。ここで何らかの心情が表わされるとしたら「尊敬」「丁寧」「親しみ」などであろう。**kızım, oğlum** などの表現にも言えることだが、これらを付け加えることで発言の「素気なさ」を回避し、結果的に丁寧さや相手への親しみを表わすことになるのではないだろうか。

canım の場合は、付けたときとそうでないときのニュアンスの差が比較的大きいような印象を受けた。表わす「心情」が「尊敬」でも「親しみ」でもなく、より具体的な話者の「考え」に近いものだからという理由が考えられる。すなわち、ここでの「心情」とは相手そのものに対する心情ではなく、相手の発言内容に対する気持ちということになる。先に、使っても使わなくても「情報」に影響がないと述べたが、もっとも「情報」に近い部分にアプローチするのがこの **canım** という表現であるとも言える。

また、今回ほとんど触れることができなかったが、これらの表現の使用が当然期待される場合と、どちらでもよい場合について研究すれば、さらに具体的な用法や役割が明らかになるのではと思う。第三者から見て「使うのが当然」と認識される場面が特定できるということは、その表現の伝えるニュアンスがある程度共通であることを裏付ける。実現すれば、会話におけるさまざまな表現の働きはよりいっそう明確になるであろう。

資料となったシナリオ

Vural Pakel, *Gençlik yargılıyor*. Ankara: Kültür Bakanlığı, 2000 131p.

Orhan Asena, *Cehennemde üç ay*. Ankara: Kültür Bakanlığı, 2000 115p.

Erhan Gökücü, *Promete 1940*. Ankara: Kültür Bakanlığı, 2000 80p.

- Anton Çehov – Nail Simon, *Sevgili Doktor*. Ankara: Kültür Bakanlığı, 1993 80p.
Ergun Sav, *Beş kız arkadaşı*. Ankara: Kültür Bakanlığı, 1995 55p.
Murathan Mungan, *Dört Kişilik Bahçe*. İstanbul: Metis Yayınları, 1997 223p.
Murathan Mungan, *Başkasının Hayatı*. İstanbul: Metis Yayınları, 1997 130p.
Murathan Mungan, *Dağlık Yatak*. İstanbul: Metis Yayınları, 1997 172p.
Nahid Sırrı Örik, *Bütün Oyunları*. İstanbul: Oğlak Yayıncılık ve Reklamcılık Ltd.Şti., 1997 371p.
Haldun Taner, *Ayışığında Şamata*. Ankara: Bilgi Yayınevi, 1996 95p.
Haldun Taner, *Günün Adamı/Dışarıdakiler*. Ankara: Bilgi Yayınevi, 1990 186p.

参考文献

- 林徹『トルコ語会話の知識』大学書林、1994年
林四郎、南不二男(編)『世界の敬語』明治書院、1974年
Resuhi Akdikmen. Langenscheidt Standard Dictionary English-Turkish Turkish-English. İstanbul: İnkılap Kitabevi, 2001
İsmail Parlatır, Nevzat Gözaydın, Hamza Zülfikar(eds), *Türkçe Sözlük*. Ankara: Atatürk Kültür, Dil ve Tarih Yüksek Kurumu, Türk Dil Kurumu, 1998
Aslı Göksel and Celia Kerslake, *Turkish: A Comprehensive Grammar*. London and New York: Routledge, 2005
Arin Bayraktaroğlu, Maria Sifianou, *Linguistic politeness across boundaries: the case of Greek and Turkish*. Amsterdam: J. Benjamins, 2001